鶴岡紀行

令和四年八月一日　大中臣正比呂

三屋清左衛門残日録と云う時代劇がある。

日残りて昏るに未だ遠し

隠居となった武士の日記の書き出しは、今で云う定年退職後の男の浪漫と悲哀を物語る。この、藤沢周平作の時代小説は好きだ。かつて、彼の郷里である山形県の鶴岡市を訪ねたことがある。小説の背景となっているであろう鶴岡の町を、私は疲れるまで歩いた。武家屋敷の面影、寺社の山門、どこか郷里の城下と似たところがある。

鶴岡城趾は詩情あふれる公園である。散策の道で、先ず漢詩の達人、土屋竹雨の「望郷の詩」の歌碑に出会う。

故国　土屋竹雨

故国山水多清暉
曰帰曰帰猶未帰
一夜夢飛皓鶴背
遠向明月峰頭飛

【拙訳】

故国の山水　清暉多し
帰らんと日い　帰らんと日い　猶未だ帰らず
一夜　夢に皓鶴の背に乗じて
遠く名月　峰頭に向かいて飛ぶ

故郷、庄内は多くの山河が清く輝いているというのに、
帰ろう〜と言いながら、私は東京で働き、未だ帰れずにいる。
昨夜の夢の中では、私は白い鶴に乗って、遠く名月が浮かぶ
故郷の月山の峰に向かって飛んでいったというのに。

そうかと思えば、少し公園を歩いた先には層雲の俳人、和田光利句碑がある。自由律詩の同人、種田山頭火と交流のあった人である。ご両人の間には山頭火の鶴岡来訪で面白いエピソードがある、いずれ書こう。「秋兎死」と言う自虐的俳号とは違い、誠実に生きた人であろう。句碑は、

麦は刈るべし最上の川のおしゆくひかり

注ぐ様は、朗誦たる詩文ではないか。

本人の本源たる農耕の感動が伝わってくる。ああ、最上川に陽が

了